

認定こども園せんだい幼稚園 園長 田原 慎也

想像の世界を自由に羽ばたく

昨年度の園だよりでも少し触れましたが、当園での描画・造形活動では「今日は象をみんなで書きたいと思います」と、象の写真を見せながら「象ってどんな形かな」「お鼻が長くて、体が大きくて、体の色は何色かな・・・」という導入はしません。幼児期（～4歳頃）はそもそも色には無頓着でりんごを黒で書いたり、人を丸で表現しながらも（絵には手足は見られなくても）「お母さんがご飯を作っているところ」などと教えてくれたりします。

「実際通りに」「目に見える通り忠実に」書かせようとする描画活動自体が幼児期にふさわしくないものであり、リアルに描かせようとする描画活動の結果、「うまく描けなかった」と描いたものを隠そうとしたり、自信をなくしたり、描くこと自体をいやがったりすることに繋がっていきます。

4～5歳児の描画活動の導入の一例ですが、まず、「みんな新幹線って知ってる？遠い遠いところにはね、【ミラクル新幹線】っていうのがあるらしいんだって。先生もあんまり知らないんだけど、ミラクル新幹線ってどんなのかな？」と問いかけます。すると、「虹色の新幹線！」と色や形について答える子がいたり、「宇宙まで行ける新幹線！」と機能について答える子がいたり、それぞれが好きなことや知っていることにテーマを引き寄せて答えてくれます。ただ単に「みんなで新幹線を描こう」という導入だと、興味のない子にとっては描く前から「描けない」、「あんまり見たことない」と不安な気持ちが広がってしまいますが、新幹線という制約はありながらも「ミラクル」という言葉で「自分なりの新幹線でいいんだよ」と自由度を保障しているわけです。

子どもたちは思い思いの色を使って画用紙に描いていきますが、「どんな絵か？」「うまく描けたか？」という絵の出来栄を求めるものではなく、想像力や思考力、表現力を発揮させるための活動なので、絵を描き終わった後に保育者は絵を見ながら絵を描いた1人1人と会話をしていきます。

「どんな新幹線なの？」

「—ハート形新幹線」

「ハートの形してるんだ、先生も乗ってみたいな～。何人くらい乗れる新幹線で、どこに行くの？」

「—家族みんなで乗れる新幹線でおじいちゃん・おばあちゃんに行ける新幹線」

先生とのやり取りでは予期していなかったような質問を子どもたちがされることもあるようですが、その場で考えを巡らせながら、そして自分の作りだした想像の世界を楽しみながら自分なりの答えを出そうとしてくれます。

テレビやスマホ、タブレットから多様な情報を引き出せるからか、10年ほど前に比べて、誰かの考えや意見に対して「そんなの（世の中には）ないよ」「それ違うよ（それは事実と違う）」と指摘する子が増えているように感じます。よく知識を持っているという面ではそれは一概に悪いことではないのですが、その一方で「今存在しないものを想像して、創造していく力をまさにみんなが身につけていけないんだよ」とも思うわけです。

情報がいつでも誰でも引き出せる時代ではありますが、その情報はそもそも正しいかわからないですし、インベーションはネット検索して得られた情報だけで成しえることなどありえません。インプット（情報や知っていること）をもとに自分なりにアウトプット（言葉で表現する、説明する、絵を描く、作る）する。自由度が保証された表現はまさに多様です。「お家の人」をテーマにした年少児の描画活動で絵の中に恐竜が描かれたこともありました。（当児曰く、「恐竜が来たけどお父さんとお母さんがいるから大丈夫」とのことでした）

多様に触れて、多様なことへの寛容性を身につけることも乳幼児期にとっては大事な経験だと思います。（ちがってもいい、おんなじでもいい、自分のままでいいんだ、こんなアイデアでもいいんだ。）空気感や見えない期待や同調圧力・・・さまざまな障壁をいい意味でひょいと乗り越えたり、突き抜けたりするような想像の楽しさを十分に味わっていきたいと思います。